わがまち Sai 発見

さいたま市

大宮盆栽美術館に行ってきた！

東武野田線大宮公園駅の改札を出てしばらく行くと、木々の緑の鮮やかな閑静な住宅街がひろがる。みれば、生垣の向こうには立派な盆栽が…。それもそのはず、ここはその名も「大宮盆栽村」。関東大震災で東京から逃れてきた盆栽園が集まってできたこの地区は、海外にも知られている盆栽の名所なのだ。そんな盆栽村を歩くこと10分、たどりついたのが、この3月28日にオープンしたさいたま市大宮盆栽美術館だ。今回この美術館の大熊敏之館長にインタビューすることができたので、美術館と盆栽の魅力をご紹介しよう。

■出足好調な盆栽美術館

さいたま市大宮盆栽美術館は、旧高木盆栽美術館の所蔵品を引き継ぎ、関連する絵画や歴史資料なども収集している、公立としては世界初の盆栽専門の美術館。

盆栽というと「和」のイメージだが、お会いした大熊館長はひげをたくわえたなかなかダンディな方。観覧者も年配の方が多いのかと思ったが、雑誌でも紹介されて「若い方も多いですよ」とのこと。入館者数は、年間目標の5万人に対して、5月末ですでに2万人を超えた。そんな出足の好調さにもかかわらず、大熊館長は「関東近県や全国的には、まだ知られていないんです」と楽観はしていない。「だから、知っていただければ来館者になる可能性のある方々がたくさんいるということ」と話す。

■「休館日は木曜日」の理由

「一番知っていただきたいのは、木曜日が休館日だということです」。

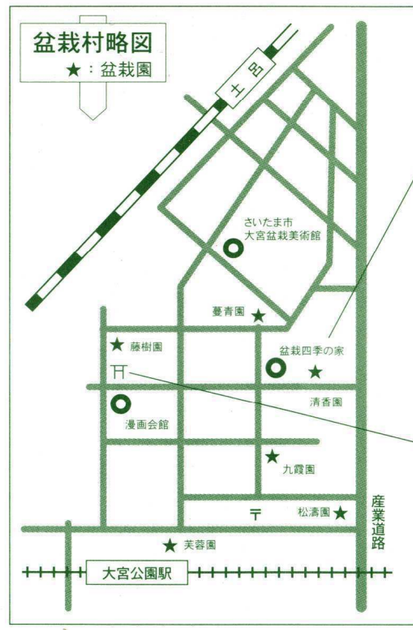
美術館というと月曜日休館が多いなか、盆栽美術館の休館日は木曜日。せっかく来ても休館日で、観覧できずに帰っていく人もあるという。では、なぜ、木曜日にしたのか？

「盆栽村の盆栽園が木曜日休園なので、それに合わせたからです。だから地区全体を見学してほしい」。

さらにお話をきくと、盆栽村全体を「産業観光」という観点から盛り上げていこうと考えていることを教えてくれた。

「産業観光はいま開拓すべき分野。たとえば、観覧者の目の前で盆栽の手入れや水やりをすれば、その場で質問があがったりして、即席のレクチャーになる。そうした現場をみていただきたい。そして実際に盆栽をはじめてみたいという時には、盆栽園に行っていただきたい。そうしたことが、伝統産業の活性化になると思うのです」。

盆栽園と連携して盆栽村全体を「エコ・ミュージアム」としたり、同じ北区の鉄道博物館と連携したりといったアイディアも。盆栽美術館は、研究や教育の場であるだけでなく、地区の活性化の拠点でもあるのだ。



木造和風の休憩所「盆栽四季の家」。盆栽村をめぐって疲れたときはほっと一息。

稲荷神社境内には盆栽村誕生に貢献した清水利太郎を記念して建立された石碑が残る。

■「毎日が展示替え」の美術館

そんな盆栽美術館の見どころはやはり盆栽。盆栽を美術としてみてもらえるように工夫しているという。その顕著な例が3つの展示空間。まずギャラリーでは、盆栽の見どころや歴史を知ることができる。座敷飾りのコーナーでは、掛け軸と一緒に室内での伝統的な展示を再現。そして圧巻の屋外の盆栽庭園では盆栽を360度から鑑賞できる。「空間の中でどうやってよさをひきだすか、それは絵画や彫刻や工芸も同じです。現代の空間の中でどう美しくみえるかという提案もしたい」という。

しかし、盆栽は生きている。絵画や彫刻を扱うのとは別の苦労もあるのでは？

「屋外に展示しているので、風や雨は時間ごとにチェックしています。風向きによっては盆栽の向きを変えたりもします。だから台風などでは観覧も中止します」とのこと。また、盆栽は太陽光が必要なので「室内は5日が限度。だから毎日が展示替え状態。こんなに展示替えをやっている美術館はないですよね」。つまり、毎日ちがう展示に出会えるということだ。盆栽だけでなく「美術館も生きている」ことを教えてくれた。

ほか、ギャラリートークや、夏休みの子ども向けのイベントなど、展示以外の活動もある。

「新しいものをつくるのが好きなんですよ」という大熊館長。ぜひ美術館に足をはこんで、盆栽の伝統と新しさに接してみてください。

盆栽庭園では、前後左右から鑑賞できる。

■大熊館長おすすめの本！

最後に大熊館長から図書館を利用するみなさんに向けて、盆栽の本でおすすめのものを紹介してもらった。

まずあげてくれたのが「盆栽　癒しの小宇宙」（丸島秀夫、南伸房著、2003　新潮社）だ。これは盆栽にこれから親しもうという人向け。写真もきれいで、「見ているだけでも楽しいし、盆栽の多様性が示されています」とイチオシ。盆栽を多少知っているという人には、淡交社ムックの「**盆栽入門**」（淡交社　2002）。監修者の竹山浩さんは盆栽村の園主のひとり。そして大熊館長も論考をよせている。「**盆栽大事典**　1～3」（同朋舎　1983）は、各項目詳しく解説している盆栽の事典。「すでに盆栽をやっている人、マニアには必携の本ですね」とのことだが、かなり値がはるので、ご利用はどうぞ図書館で。そして、盆栽村でいえば、「**大宮盆栽村クロニクル**」（宮田一也著、アーカイブス出版　2008）をあげてもらった。「歴史性や文化性を知ろうとするなら読んでいただいていい本です」。盆栽村の起こりから第二次大戦後の復興までを、小説のように読むことができる。鑑賞する側からの入門書だと、NHKの「**美の壺**」シリーズ（日本放送出版協会）の「**盆栽**」（2006）や「**水石**」（2009）がおすすめ。「写真を通じてでも真髄が伝わってきます。これはいい本です」と大熊館長も太鼓判。

おすすめしてもらった本はさいたま市の図書館で所蔵しているので、ぜひ図書館で盆栽の世界に触れてみてください。

さいたま市大宮盆栽美術館

埼玉県さいたま市北区土呂町2-24-3
TEL：048－780－2091

開館時間　3月～10月　午前9時～午後4時30分
11月～2月　午前9時～午後4時
休館日　木曜日（国民の祝日をのぞく）、年末年始、展示替え期間
観覧料　一般300円（200円）
高大生・65歳以上150円（100円）
小学生・中学生100円（50円）
※（ ）内は20名以上の団体料金

アクセス　JR宇都宮線「土呂駅」下車　東口より徒歩5分　または、東武野田線「大宮公園駅」下車　徒歩10分
駐車場有　44台